

## 大会長挨拶

日本放射線影響学会第 55 回大会  
大会長 福本 学 東北大学加齢医学研究所 教授

この度、日本放射線影響学会第 55 回大会を開催させていただくことになりました。仙台での開催は 10 年ぶりの 5 回目となります。

昨年の東日本大震災では、最大震度 7 の大地震と巨大津波が襲来し、それに伴って起こった福島第一原子力発電所（福島原発）事故は、地球温暖化解決の切り札であった原子力エネルギー源に対する私たちの考えを一変させました。環境中に放出された放射性物質の生物・人体影響と除染は最重要の課題となりました。世界中の人々が放射線科学に、「直ちに影響のない放射線被ばく」が将来も生態系や人類に影響しないのか、について回答を求めています。残念ながら現時点の放射線科学が明確な解答を出せるところまでは至っておりません。

一方、放射線の現象としての生物影響、人体影響はほぼ語り尽くされていると考えられます。私たちのなすべきことは、現象の背景となる物質や機構の解明と定量化です。今大会をお引き受けした 2 年前に考えたメインテーマは、原子カルネサンスに呼応するかたちで「キラリ放射線！原点を見つめて」としておりました。しかし、福島原発事故勃発から 1 年半経過したことを踏まえて複数のキャッチフレーズが浮かびました。

「福島第一原発事故の起承」：本学会の目指す「放射線の人体と環境に与える影響研究」は、多くを不幸な原子爆弾や放射線事故から学んできました。今大会が、原点に立ち返って言葉の定義と知識を再確認して共有し、福島原発を中心として放射線事故を深く理解することで、今後の転結を目指して、私たちが今なにをすべきかについて考える機会となることを願っております。

「Meet the old expert」（温故創新）：会期中に、近藤宗平先生はじめ鋭い先人から直接多くを伺うことで熱い思いを引き継ぎ、若人が、持っている無限のエネルギーを新たな科学を構築することに集中できるきっかけとなることに少しでも貢献できればと考えております。

「頭も一杯、腹も一杯」：大会長を引き受けて、仙台の影響学会員を数えてみたところ、なんと十指に満たず、極めて重大な時に人材が払底している、これは驚愕でした。なんとか大会運営から活性化しなければいけないと考えました。そこで、いくつかの新機軸を試行します。示説の分類・座長は若手の会に委ねました。知識を共有するために朝の教育講演を設定しました。市民公開講座は「放射線とマスメディア」として、わからないことがどうわからないかを一般の人に伝える、について掘り下げられればと考えております。示説でゆっくり議論できるよう、1 日目の夕方に軽食と飲み物を用意します。会場周辺は食堂が少ないので、可及的多くの方々に会場に留まっていただくようランチオンセミナーを企画